

令和6年度「全国学力・学習状況調査」の結果 —分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

区 名	淀川区
学 校 名	新東三国小学校
学校長名	岩井 伸夫

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、令和6年4月18日（木）に、6年生を対象として、「教科（国語・算数）に関する調査」と「児童質問調査」を実施いたしました。

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様等に説明責任を果たすとともに、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、各学校が調査結果や調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにしてまいりましたので、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

1 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査内容

(1) 教科に関する調査

- ・国語
- ・算数

(2) 質問調査

- ・児童に対する調査
- ・学校に対する調査

3 調査の対象

- ・国・公・私立学校の小学校第6学年の原則として全児童
- ・新東三国小学校では、第6学年 47名

令和6年度「全国学力・学習状況調査」結果の概要

平均正答率は、国語、算数ともに全国平均、大阪市平均を下回った。また、無回答率については、国語は全国平均を下回ったが、算数においては全国平均を大幅に上回った。

国語では、知識及び技能については「我が国の言語文化に関する事項」が最もよくできており、「情報の扱い方に関する事項」が最も悪く全国平均から12.4ポイント下回った。思考力、判断力、表現力においては、「A 話すこと・聞くこと」「C 読むこと」は全国平均を上回ったが、「B 書くこと」については、全国平均より12ポイントした回った。

算数科は、どの領域、観点においても全国平均と大阪市平均に届かなかった。ほとんどの領域、観点において全国平均と大阪市平均に2～4ポイント程度届かなかったが、その中で「C 変化と関係」は全国平均より7.7ポイントと大きく下回った。

児童質問紙では、「自分にはよいところがある」「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思う」「将来の夢や目標を持っていますか」「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか」の項目では当てはまると答えた児童が全国平均を大きく上回った。携帯電話やスマートフォンでゲームやSNSをよくする児童の割合は全国平均より高かった。また、授業で話の組立てなどを工夫して発表している児童や、話し合い活動で考えを深めたり、新たな考えに気付いたりしている児童の割合は全国平均を下回った。

分析から見えてきた成果・課題

教科に関する調査より

〔国語〕

調査の結果から、知識はある程度身についていると考えられる。また、「A 話すこと・聞くこと」「C 読むこと」は全国平均を上回っていることから、思考力、判断力は養われていると考えられる。しかし、「情報の扱い方に関する事項」「B 書くこと」について大幅に全国平均を下回っていることから、得た知識や情報をどのように扱い、それを文章などで表すことに課題が見られる。

〔算数〕

算数については、どの領域・観点についても全国平均を下回っていることから、基本的な知識・技能やそれらを活用する能力などに課題が見られた。しかし、大阪市経年テストでは、小学校3年生のときから大阪市平均との差が少しずつ縮まってきている。今回の全国学力・学習状況調査では、大阪府との差は3ポイントで、昨年の経年テストにおける大阪市平均との差より縮めている。これは、習熟度別学習等で、児童一人ひとりにきめ細やかな支援をした成果が少しずつ表れていると考えられる。

質問調査より

携帯電話やスマートフォンでゲームやSNSをよくする児童の割合は全国平均より高かったことから、携帯電話やスマホの使い方に関する理解が不十分であると考えられる。

「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思う」「自分にはよいところがある」「将来の夢や目標を持っていますか」に肯定的に答えた児童の割合は全国平均を大きく上回ったのは、普段の授業や活動で児童一人ひとりに対して寄り添い支援してきた成果が表れている。

「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか」の項目ではほとんどの児童

が肯定的な回答をしていることからこれまでのいじめ防止についての取組みの効果が表れている。しかし、一部否定的な回答をしていることから、いじめ防止の取組みを不十分な点があるといえる。

授業で話の組立てなどを工夫して発表している児童や、話し合い活動で考えを深めたり、新たな考えに気付いたりしている児童の割合は全国平均を下回ったことから、授業での話し合い活動の工夫が必要である。

今後の取組(アクションプラン)

○国語科や算数科では、これまでの児童一人ひとりに対するきめ細やかな支援を継続するとともに、授業において話し合い活動の工夫を検討し、児童が話し合い活動によって、考えを深めたり、新しい考え方に気付いたりできるようにする必要がある。話し合う際には、ただの意見交流に留まらないように、話し合う必要性を感じさせたり、話し合う目的を共有できるようにするなどの工夫が考えられる。

○道徳科での「節度・節制」や、情報モラル教育などを通じて、児童が携帯電話やスマートフォンの危険性を理解できるようにしていく必要がある。

○今年度、本校で進めている道徳科の授業研究で、話し合い活動の工夫を検討し、児童が「主体的・対話的で深い学び」を実現できるようにしていく。